

令和5年度研究プロジェクト研究概要報告

研究種別	■自主研究 16	公益目的事業 19
主査名	金 利昭 茨城大学名誉教授	
研究テーマ	道路の中速帯・中速モードの利活用に関する基礎的研究	
研究の目的： <p>軽自動車未満の交通手段は、小型化・電動化・自動化に伴って交通モードが多様化している。一方で、道路交通法の改正によって電動キックボード等の新しいモビリティが自転車並みの扱いとなったことにより、これまで自転車交通問題の解決のために鋭意整備されてきた自転車通行帯に自転車以外の中速モードが混在することとなった。本研究は、中速モード及び歩道と車道の間位置する中速帯の利活用について展望する。</p>		
研究の経過（4月～3月）： <p>本研究は、中速モードの代表である自転車の教訓を生かすべきとの立場をとる。このため研究会の中に、これまで自転車研究と施策を中心的に担ってきた7人で構成したワーキング（WG）を組織した。</p> <p>4回の研究会と6回のWGを行った。研究会ではゲスト講師を森本章倫教授（早稲田大学）、古池弘隆教授（宇都宮共和大学）、塚口博司（立命館大学）に依頼し広く話題提供を頂いた。</p> <p>2023年11月26日（日）開催の土木計画学研究発表会のスペシャルセッション「中速モードの通行空間を問う」を企画し、WGを中心に検討した成果を報告した。ここでは、これまでの自転車に関わる研究と施策を総括した上で、森本章倫早大教授（都市計画）、牧村和彦 IBS 理事（都市交通）を加えて、自転車を含む中速モードの共存について、既存の制度枠組みに捕らわれず道路ニーズを総合的に議論し、未来を考える視座を洗い出した。</p>		
研究の成果（自己評価含む）： <p>①これまでの自転車研究・施策を振り返ることにより得られた教訓は、自転車は止まりたくない・減速したくないという特性を有する乗り物であること、ルールが見える化・市民的共感が大切であること、左側一方向通行を徹底することが安全上肝要である。また道路デザインの課題として路上停車、自転車道の理想形の検討、緩速車道の活用、多車線道路の車線削減の可能性、交差点改良がある。②中速モード・中速帯検討にあたっての基本構造として共存性・中速帯の概念、通行帯配分の考え方、共存要件を提示した。③多様な交通モードの現状と課題を整理し、中速モードを含む軽車両の法的取り扱いが複雑・不明瞭であること及び歩道を考えることの重要性を指摘した。④中速モードの海外動向を整理し、ITF（国際交通フォーラム）がマイクロモビリティを車両重量 350kg 以下、設計速度 45km/h 以下の超小型車両と定義することを提案していること、速度管理として安全相対速度 30kmh を大前提とした中速帯(6～20or25kmh)の区分等を把握した。⑤中速モード別の普及・交通量が共存の可能性を左右するだろうこと、通行帯だけでなく駐輪場の問題もあること、また歩行者保護の観点から中速モードの通行空間は歩道ではなく車道側との主張を確認した。⑥バス・タクシーや自動運転車のカーブサイド問題等の多様な道路ニーズがある。</p>		
今後の課題： <p>中速モード・中速帯については、日米欧をはじめとする各国で検討され、現場での試行錯誤が続けられている。よって海外情報を収集するとともに、日本国での最適解を見出すための検討を継続すべきである。</p>		